

B. 発展的目標をもた生徒の管理・指導

戸茱 進・原田 秀雄・中尾 正三・新村 泰子・
佐藤クニ子・盛田 義彦・酒井 為久

ま え が き

一昨年度から、われわれはこの問題を、継続的な実践研究のテーマとして、取り上げてきた。これは先づ第一に、多人数教育の場という条件に、強く支配されて、従来、ともすれば規格統一的な形になり勝ちであった生徒指導の概念に対し、一人一人の生徒に、より望ましい方向、ないしは在り方を、要所要所で示すことによって、同じ在学年数内での、生徒の人間としての成長の効率を、如何に高めてゆくことができるか、という問題を考えたいと思ったからである。

そして第二には、今まで指導の原理的統制に対して、その技術的統制として受けとられ勝ちであった生徒管理、あるいは逆に、家庭教育に於る放任主義的発想から、事実上は、教師の単なる技術的統制の放棄に近い形で、毎年、ほとんど同じ出発点から、年中行事的に生徒集団に於る試行錯誤の繰り返しを経験させる過程の中で、いくつかの、人間としての生活の知恵を体得させることが、生徒管理であるというような、両極端の考え方に対して、それらの中間をゆく、生徒の集団としての自発的活動の効率化をはかる組織、およびその運営の追求という形で、生徒管理の問題を、再検討してみたいと考えたからである。

われわれのこの研究も第3年目に入った本年は、この辺で一つの区切りをつけ、今後の展開の足場を固めることも大切ではないかと考え、また一方、今迄に外から攻めてきたこのテーマを、いわば一応整理のできた機械の点検・試運転と言ったような意味で、ある程度研究の進んだ段階ではその核心に切りこんで、内面的に取り扱ってみることも、かねてからの計画であった。

ところが単にこのような研究進展の上の当然の過程としてのみではなく、われわれの研究と密接に関連して次第に変貌してきている生徒集団の動向の面からも、このような角度からの切り込みが、是非とも必要となってきたのである。というのは、昨年われわれの研究の一部である「学校に対する誇り」・「伝統」に関する予備調査の結果に刺戟され、先生に引張って貰うのではなく、自分達の力で歩くことができるようになるたい、との切望が、生徒の中からいろいろの形で湧き上ってくる気配が感じられるようになってきた。従ってこの機を逃さず、こちらからも積極的に応じてやる直接の必要も生じてきた次第である。

このようなわけで、本年度の究研目標を主に生徒の管理・指導の内面化に置いて努力してきた。その在りのままの姿を御報告して、御批判・御指導を仰ぎたいと考えている。

今回の第11報は、以上のようなねらいで、全員の協力によって得られた資料をもとに、本年度の国立大学附連高校部会の第9回高校教育研究大会において戸茱が代表として発表したもの、および、本年11月に開催された本校の中等教育研究協議会で発表したものなどを総合要約したものである。また第12報は、昨年度の第5報の特にH・Rに関する面をとり上げて深化をはかったもので、佐藤が、13・14報は、同じく昨年度の第5報のH・R以外の面についての発展で、それぞれ盛田および原田が、また第15報は、昨年度の第8報の進展したもので、盛田が、さらに第15報は、昨年度の第6報に続き、これを完結させたもので、中尾が、そして最後の第16報は、昨年度の第8報の具体的展開で、新村が、それぞれ上記の本校での研究協議会に発表したものを骨子にして、その後の新資料を補足したり修正を加えたりしたものである。なお、確信のもてる資料的裏付けは不十分なので、本紀要には割愛し明年に総合して発表する計画である中学生徒会の管理と育成に関する実践研究も、酒井を中心に進められ、現在までに得られたいくつかの根本的な問題点の提起を、本校の研究協議会では行なったことを付記する。